

～ジェンダー・イスラム・社会主義～ウイグル社会における女性の社会的地位～

藤山 正二郎

Gender, Islam, Socialism The social position of women in the Uyghur society

Shojiro Fujiyama

「要約」

中国において社会主義は必ずしも女性を解放しなかった。ウイグルでもそうであった。社会主義革命といっても当初は旧勢力との妥協を余儀なくされ、その徹底を追及した人民公社でも、育児は保育園などで集団保育、食事も生産隊ごとに食堂がつくられ、女性は伝統的な役割から解放されたに見えたが、集団労働の点数制には男女の差が厳然として存在した。文化大革命以後、改革開放は家族の姿を回復させた。それとともに男女は旧来の役割に戻るように思えたが、イスラム法はすでになく、家族はある意味で近代化されている。女性の社会的進出もめざましいものがある。

イスラム圏は一様ではなく、ウイグルのようなトルコ系民族はアラブとかなり違う。それを相続、内婚率、出生率、離婚率、夫婦の年齢差などから女性の地位を分析し、イスラムの多様性を描き出している。

「キーワード」

中国、ウイグル、女性の地位、イスラム、社会主義

1. はじめに

ウイグルの女性の社会的地位については、この地域がイスラムであり、ある時期から中国の社会主義体制下に入ったことで複雑な様相を見せている。中国側の見方によれば、イスラムの家父長制において、女性は単に抑圧されているとみなされ、中国の「解放」によって、女性の地位は向上し、さらに資本主義との奇妙な折衷である開放経済下においては、解放前に逆戻りしたなどといわれている。だが、一般的にも、女性の地位がどのような基準で「向上」し、男女平等になるかは難しい問題である。イスラム社会では女性の地位は低いという通念はオリエンタリズムのように、根強いものである。だが、現実はずしもそうではない。

イランに1975年に革命が起き、王制が倒れ、ホメイニーを指導者とするイスラム共和国が成立した。それに伴い女性に関して、近代化に逆行するような政策がとられた。家の外に出るにはヴェールをかぶることに象徴されるような、「公的存在としての男性」と「私的な存在としての女性」の男女隔離政策がその典型的なものである。だが、この隔離政策は当然女性だけの空間を生み出した。女学校、女性のための医院、スポーツ施設などである。そこのスタッフも女性であるから、女性の雇用機会が増大し、管理職も増え、女性の自己決定権が高められた。教育においても男女別学によって、保守的であった農村部でも小学校就学率が上昇し、1994年度には女子の占める割合は47%に改善された。そして、1999年度には大学合格者の52%を女子が占めることになった。さらに、ヴェールさえ被れば、男性の領域にも進出できることになり、政治の場でも多くの議員が誕生している。⁽¹⁾

更に別の事例を提示すると、トルコはイスラム諸国のなかでイスラムを私的な領域に限定し、いわゆる近代化、西欧化を行った唯一の国である。その国で最近イスラム主義が再興している。トルコではイスラムを象徴するスカーフは公的な場では禁止されている。それが近年、民主主義の名の下に、スカーフを着用する自由を求める運動が女子学生などによって行なわれている。イスラム主義者の彼女たちは、フェミニストの女性たちと「女性の対象化」、すなわち女性の身体と性の商品化を批判する点で共通性を見出している。⁽²⁾

ウイグルについては、単にイスラムや社会主義イデオロギーではなく、それとは違う文化の力も考察し、女性のおかれた状況を家族構造、結婚、男女の役割構造などから考えてみたい。

2、女性の地位に関する社会的変数

トッドは家族構造から移民の問題、経済現象などをマクロな視点から論じ、すべての問題を家族構造に還元するので、マルクス主義なきあとの決定論だと批判されている。たしかに世界的広がりを持つ家族類型はやや粗雑ではあるが、女性の地位と家族構造の考え方に限定して、彼の考え方を援用してみたい。家族システムの中では、女性の地位が高いか低いかが本質的な要件である。⁽³⁾

(1) 第1の変数は相続形態である。

兄弟姉妹ともすべて均等に相続される家族構造なら、人間一般、諸民族も男女も平等であるとの考えが根底にある。例えば、パリ盆地の平等主義核家族の双系性は、男と女を区別しない遺産相続システムによって表現され、女性解放に結びつく。⁽⁴⁾ 日本のような直系家族の場合は、長男だけが相続する。これは兄弟と男女に差異があることを認める構造であり、これは不平等主義的である。だが、例外として、東北の姉家督のように長女が長男より年上の場合、婿養子を迎えて家を継ぐ慣行、また西南日本の末子相続もある。さらに、明治以後、いわゆる長男相続を根幹とする日本の近代家族は武士階級をモデルに形成され、旧民法によって支えられていただけのことにすぎないという見方もできる。だが、均分相続になった現在でも、長男優先など家の意識の心性構造は残っている。

ウイグルの特徴的な相続制度は西南日本にもみられる「男子末子相続」である。長子から次々と独立し、結果的に末子が老親の扶養をすることになる。ウイグルの家族類型は「内婚制共同体家族」であろう。これはアラブから中央アジアなどのイスラム圏にひろがり、兄弟の平等と結束を特徴とする、親子関係はそれほど権威主義的ではない。

末子相続の習慣は北東アジア、南アジア、ヨーロッパなど広く分布していた。モンゴルのチンギス・ハーン一族もそうであった。ヨーロッパまで広がったモンゴル帝国が長続きしなかったのはこの相続が原因とも言われている。末子相続といってもこれは実質的な均分相続であり、長男相続のように一族の継承を集中させないで、逆に拡散させるのである。

また、モンテスキューの「法の精神」には次のように書かれてある。「タルタル人の間では、相続人となるのはつねに末の男子である。それは上の男子たちは、牧人生活を

営みうるようになるにしたがって、一定数の家畜をもらって家から出て、新しく住居を構える。父とともに残る末っ子の男子が、父の本来の相続者である。」⁽⁵⁾ このタルタル人とは中央アジアの諸民族をさすと思われる。

現在、トルコの黒海側の村において、「拡大家族が少なく直系家族が多いのは、両親が複数の息子夫婦ではなく、一人の息子夫婦と同居するからである。この村では、末子は優しいといわれるように、息子たちが年齢順に職を得て、家庭を出て行って、残った末息子が両親と同居するが多い。」⁽⁶⁾ この場合形態としては直系家族であるが、観念は核家族であろう。

このような相続慣行が存在する基盤としては日本では、地主小作の同族結合より、同等の家の結合である講組結合の村落に多く見られる。耕地が狭く、生産力も低いため、多くの家族成員を抱えきれない理由から、多くの労働力を必要とする水田より畑作の村に多い。また直系家族より、核家族に多い。これをウイグルに関して考えてみると、戦前は封建地主制ということになっている。村の周りは砂漠であり、水の問題もあって、広大な農地はなかった。

ウイグルでは戦前はイスラム法により、娘は息子の2分の1、妻は4分の1の相続とされていた。戦後は中国の法制下に入り、均分相続である。日本の家のように長男が相続するとの規定もない。家族形態は封建家長制の大家族の説と、既婚の子女は分居していくから大家族はまれであるとの説がある。これは地域による違い、戦前は地主などの階層社会だったことから階層による違い、を考慮に入れるべきであろう。

末子相続の事例をいくつか挙げてみよう。カシュガルの農村に住む88才(夫)と82才(妻)には、4人の息子と1人の娘があり、娘はカシュガル市内にいる、息子はすべて近くに住む。隣に住む末息子(裏木戸でつながっている)に世話になっている。食事は別のこともある。

ホータンの農村に住むKさん(78)は、子どもは結婚とともに近くに分居し、現在は次男(男の末子)に面倒を見てもらっている。結婚後15年間、子どもがなかったので、離婚して、40才で再婚、10人の子が産まれて2人は亡くなった。耕地は2人の息子の分も含めて10ムー(1ムーは約666平方メートル)所有している。結婚後も親子一緒に耕作して、収穫の時には分配する。

ホータンのある郷で一番の金持ち(45)は、奥さんは2番目の妻、長女は中学教師、次女は小学6年生、長男は医者、次男は師範学校、3男は衛生学校に行っている。この

末息子に家を継がせる。土地は800ムー所有し、収穫のときなどには約20人を雇用している。また、病院、学校などを作って寄付を行った。彼の成功はポプラの苗を作り、国の植林政策にうまく乗ったことだといわれている。

イスラムが生まれたアラブの地域では、イスラム以前は、女性は財産とみなされ、女兒の嬰兒殺し、遺棄などが行われていたが、これらを止めさせたこと、また男子の2分の1でも女子に相続権が与えられたことは、イスラムが女性の地位を改善したといえる。だが、現在でもこのコーランの遺産相続規則は、主にイスラムが広まったアラブ、イラン、マグリブ、パキスタンでは実施されていない。⁽⁷⁾ 財産は息子たちの間で分割され、娘たちは除外されている。これらの地域は典型的な家父長制である。

戦前のウイグルではイスラム法に基づいて相続が行われていた。親の財産は男子が女子の2倍というように規定通りに行われていた。ウイグルでは財産は父、母、夫、妻、前夫の子、前妻の子というように分別してある。すでに述べたように末子相続は、結婚するとともに親から財産分与を受け、独立していく。結果として、末子が親のところに残ることになる。このことから考えると、ウイグルの女性の地位は、日本の直系家族、アラブの父系共同体家族に比べると高いことになる。

日本で普通に思われていた長男相続は世界的に見れば珍しく、家代々、祖先崇拜と結びついている。これがどのような心性を生み出していたのかは興味深いがここでは考察しない。

(2) 第2の変数は内婚率である。

内婚率が高いと女性を自分の集団に閉じ込めていることになる。ウイグル民族はイスラムとして当然ながら宗教内婚率は高い。また、民族内婚率も高い。他民族との通婚は80年代、イリでの調査によると、ウイグルは2.5%で、⁽⁸⁾ (カザフは4%、モンゴルは0.2%) これも相手はほとんどイスラムの民族である。さらに重要なのがイトコ婚などの近親婚である。

カシュガル農村、Cさんの例(28才)を見ると、彼女はこの村で生まれ、15才で結婚、相手は母方のイトコである。イトコだと自分の面倒を見てくれるからと、祖母がこの結婚をすすめた(祖母にとっては自分の孫同士が結婚したことになる)。

イトコ婚は父系制を補正する緩和剤といわれている。新婦にとってイトコに選ばれたということは、オジ、オバの家に入るということの意味し、オジ・オバとオイ・メイの

自然な関係は、世代的隔たりと権威関係の不在を組み合わせたもので、一般的には相対的な甘さ優しさを特徴とする。従って内婚制では結婚に伴うストレスは弱くなる。こうして女性は生涯の最初から終わりまで未成年の立場に維持され、保護される。アラブ・イスラム圏の女性は、幼児遺棄などはなく、身体的にはいささかも脅かされることはないが、結局は徹底的に閉じ込められている。⁽⁹⁾

ウイグルも以前は当人ではなく回りが配偶者を決めていた。1983年、カシュガル
の工場に働く130人のウイグル人に調査したところ、自分で配偶者を見つけた人5
7・7%、親以外の誰かに紹介された人8・6%、親などが決める33・8%であった。
⁽¹⁰⁾ サンプルが少なく、また結婚の時期も明確でないことから、この調査の信頼性は低
い。だが、1983年の時点で、33・8%が親の決める結婚をしている。カシュガル
という都市部でさえこの数字であるから、農村部ではもっと高率になると推測できる。
現在のウイグルの都市部でも親の反対があればあきらめるという人は多い。

イスラムはインセスト・タブーとして一定の範囲内の性関係と婚姻を禁じているが、
第一イトコはそれに含まれない。中国の中央政府は古い習慣だとして、イトコ婚に反対
しているが、イスラムの民族ではよく行われている。1985年の南疆での調査では、
8093組のウイグル、タジク、ウズベク、回、キルギスの夫婦のなかで、3493組
のウイグルの夫婦中、17・7%が、1325組のタジク中、42・8%が、2863
組のキルギス中、45・2%が近親婚であった。⁽¹¹⁾ 他のイスラム諸国に比べると、
80年代のアルジェリアでは29%、モロッコでは25%であり、⁽¹²⁾ ウイグルの近
親婚率は高くない。他の主な民族でイトコ婚を認めている民族はユダヤと日本であるが、
ユダヤは10%（18ッ19世紀のフランス在住のユダヤ）、日本は6から7%（戦前）
であった。⁽¹³⁾

ウイグルのような共同体内婚制家族だと兄弟間の結びつきは、イトコ婚によってさら
に強くなる。だが、ウイグルはイスラム民族の中では近親婚率は比較的low、これから
みると女性の地位に関しても相対的にlowではないことになる。

(3) 第3の変数として、夫婦の年齢差である。

年齢差が大きいことは男女間の不平等関係の表現と考えられる。夫が妻よりも明確に
年長のところでは、夫が實際上、父親の権威を行使している。1970年前後で、イス
ラム諸国（イラン7・0歳、エジプト6・6歳、パキスタン5・5歳）は大きく、ポル

トガル(2.2歳)は小さい。(14)

アクス(1993年)での294組のウイグル夫婦の平均年齢差は5.4歳である。だが、これは再婚者の年齢差が大きいのであり、初婚者20-24歳の夫婦の年齢差は2.7歳である。カザフやモンゴルに比べると小さい。ウイグルで特徴的なのは、女性の初婚年齢が低いことである。これは中国を構成する56の民族の中で一番低い。農村部の墨玉県で1950年14.5歳、1984年17.3歳であり、都市部のウルムチ市で1950年16.9歳、1984年23歳である。(15)

(4) 第4の変数は出生率である。

女性の地位が上がるとともに出生率は下がる。女性の人生に男性と同じように家庭外で仕事をするのが加わると、子供をつくることが人生の選択肢の一つにすぎないことになる。

ウイグルでは1989年から計画出産の政策がとられ、少数民族では農村部で3人、都市部では2人と決められた。しかし、政策についての理解が十分でなく、3人の娘をもっている息子がほしいからあと一人子どもを作っても良い、と考える人もいる。

新疆の1990年センサスを使用し、主要な4つの民族(ウイグル、漢、カザフ、回)の出生率と性比率を分析すると、次のような結果が出ている。(16)

どの民族も25-29歳が出産のピークである。

出生率はウイグルが4.2人、漢は1.4人、カザフは3.9人、回は2.4人である。(参考までに1995年、日本は1.5人である)

これを見ると、中国の家族計画政策はウイグルとカザフに関しては、限定された影響しか与えていない。ウイグルでは40%が4人以上生み、13%が7人以上出産しているからである。だが、どの民族でも97%が35歳前に出産をすませていることは、家族計画が実施されていることを示している。

(5) 第5の変数は離婚率である。

1920年代、新疆では簡単に離婚が行われていた。イスラムの男は仲介人を通して、一時的な妻を見つけることができ、伝統的なイスラムでは例えば宗教的な活動のため、長いこと家を離れる時は、その地で一時的な妻が許されていた。(17)

先にも引用したイランのイスラム革命政権は、復古的な婚姻制度を定めた。「シーア

派特有の婚姻制度である一時婚も肯定するようになった。契約によって一定期間（1時間から99年の間で設定）婚姻関係を結ぶこの制度は、あきらかに女性に不利なものである。通常の結婚と同様に男性から女性に結納金のようなものが支払われるが、両者の間に相続は発生せず、子どもは夫に属する。」⁽¹⁸⁾

このような習慣がウイグルなどの結婚観に影響を与えていたのだろうか。離婚に対する態度は、シボ、モンゴル、カザフ、タジクは否定的であり、離婚そのものが少なく、離婚した女性、その家庭は差別される。ウイグル、キルギス、ウズベクはイスラムの婚姻観念の影響が強く、離婚は多い。イスラムでは離婚は結婚生活不和の解決法と考えられている。離婚の際、妊娠している場合は出産後、離婚可能となり、乳幼児がいる場合、男は扶養する義務がある。

離婚の形式に関して、スンニー派の規定では夫が「タラーク」といえば夫婦関係は停止され、タラークを3回いうと離婚は決定的となる。これは、戦前のウイグル、キルギス、ウズベク、回民族では行なわれていたが、60年代以降はなくなっている。過去、離婚はほとんど夫からであった。もし、回民族で妻から離婚を申し出た場合、財産を分与されないどころか、夫に金銭を与えないといけない。ウイグルでは夫が音信不通になった場合、また半年同居していない場合は、アホン(イスラム聖職者)に申し出て、離婚できる。近年では、1991年、アクスでの170件のウイグル人の離婚のうち、75%が妻の方からであった。⁽¹⁹⁾

南疆のカシュガル、アクス、ホータンの3地区(ウイグル人が89%を占める)では5の結婚に対して2の離婚がある。結婚する人のうち39%が再婚である。1988年人口の2%を抽出した中で、男性が離婚再婚をした人は50%、女性は30%であった。離婚率は、南疆、とくにモーユ、ホータン県で高く、東疆、北疆は低い、農村は高く、都市は低い。農民は高く、幹部、知識人、工場労働者は低い。離婚原因は感情不和が多い。

離婚率はウイグルでは明確な統計がないので比較は困難であるが、1988年、男性の半数が離婚を経験し、南疆では離婚率40%(婚姻数を100)と高い。中国全体では1995年で26%である。日本は先進国の中で低かったが、30%(1996年)となり、欧米の水準になりつつある。(ウイグルは離婚率5.25%で中国平均の7.89倍である。統計の年度は不明であるが、これだと、米国の4.95を上回っている:人口1000人に対する割合)

ではなぜウイグルに離婚が多いか、これはデータが不足して明確にはいえないが、先に述べたようなウイグル特有の早婚が主な原因だとする研究者が多い。親は子供をそして孫を早くほしいという。だから離婚の最大の原因は子ができないことである。結婚は早くするものであり、いやになれば別ればよい。それは特別な傷とはならない。

さらに、離婚後の財産の配分は、結婚時に持ってきたものはその人のものであり、子女の養育権は幼いときは母親が育て、その後父方に行くというスンニー派の規則があるが、実際はほとんどが、父方から養育費用をもらって、母方が育てるケースが多い。このように女性は一定の財産を持ち、子女の監督権を持つ。また、実家は離婚後、女性の帰るべき家であり、そこで父母の庇護を受けることができる。

また離婚再婚を繰り返し、1988年の427人の調査で、平均婚姻回数は4.33回である。また復婚といって同じ人と再婚する人も多い。

このように離婚しやすい環境がある。

3. 男女の仕事の変化

ホータンの小学校の先生から次のように聞いた。「学校では男女は区別しない。女らしく育てるといような教育もしない。しかし、休み時間など男女は別れて遊んでいる。民族の踊りや歌の時に男女一緒に行く。男子は恐れずに何でもやる。女子は親切、大人を尊敬する、きれいにしている、勉強をする、両親や先生の話を良く聞く。農村部では父権的なところがあるが、都市部では平等である。女子のほうが成績がよい。女子は看護婦、教師、映画スターなどの職業を好み、男子は運転手、教師、エンジニア、軍隊などが人気がある。最近変わってきたことは女の子の成績がよくなってきた、女の子は人の言うことをよく聞き、家事労働からも自由になってきたからである。」

子供たちは6、7才頃から男女別で遊ぶ、女の子はゴム跳び、男の子はぶち独楽、めんこなどで遊び、そしてよく大人の手伝いをする。

開放経済の下で、新疆の女性、マイノリティはその利益を享受できたのであろうか。この改革の時代に、基本的な役割を果たすのは教育である。新疆でも80年代から、大学、高等専門学校を含め、多くの高等教育機関が設立された。マイノリティの教育程度も急速に向上し、女性は特にそうであり、1988年新疆の女性の大学生は44%を占めていた。

ウイグルの女性の非識字率はどうか。1990年、15歳以上を対象にした

調査によると、タタールが6.6%で最善の状況にある。ウイグル(29%)はモンゴル、漢などととも20-33%と中間的な段階にある。チベットなどは80-90%と悪い状況にある。ウイグルは男女間の差が4.3%と非常に小さいのが特徴である。通常は差が小さいと識字率全体も上がるのだが、ウイグルだけはそうではない。(20)

また女性とマイノリティがどのような職業に進出したかを書き出してみたい。女性の割合が多い順に並べている。(21)

エリート：専門職と技術者(女性が多い、マイノリティが少ない)

教師(女性もマイノリティも一番多い)

事務職(女性少ない、マイノリティ少ない)

国営企業の管理職(女性もマイノリティも一番少ない)

政府の職員と司法関係者(女性もマイノリティも少ない)

マスコミなど(女性もマイノリティも少ない)

中等学校以上の教師(女性もマイノリティもほぼ同数：職業ランクでは第1

位)

医療関係者(女性が多い、マイノリティは同数)

芸術とエンターテインメント(女性同数、マイノリティは多い)

非エリート：農業者(茶、果実、穀物)(女性同数、マイノリティかなり多数)

一般労働者(女性もマイノリティも少ない)

綿花農業者(女性もマイノリティも多い)

電気関係労働者(女性もマイノリティも少ない)

建設労働者(女性少ない、マイノリティかなり少ない)

手工業(女性少ない、マイノリティかなり少ない)

サービス業(女性同数、マイノリティ少ない)

農産物運搬など(女性一番少ない、マイノリティ少ない)

織物業(女性一番多い、マイノリティ少ない)

牧畜(女性同数、マイノリティー番多い：職業ランクでは最下位)

小売業(女性かなり多い、マイノリティ少ない)

野菜農業(女性同数、マイノリティ少ない)

販売業(女性、マイノリティ同数)

販売代理店(女性、マイノリティかなり少ない)

狩猟、林業、漁業（女性少ない、マイノリティ同数）

農業一般（女性、マイノリティ同数）

これらを1982年と1990年の時間的变化を見ると、エリート職で女性もマイノリティも増加しているのに反して、非エリート職では減少している。この点でも開放経済の恩恵を受けているといえる。だが、女性の改善は男性を上回っているが、マイノリティが漢人より改善されたとは必ずしも言えない。また、この調査では女性を漢人と他の民族に分けて考慮していない点は不満が残る。

カシュガルの近くの農村で調査された女性の地位の歴史的变化について述べてみよう。女性の地位は中国人の学者によれば、集団化の時期が終わると再びイスラムの家父長制の手に落ちたといわれるが、農村の女性の地位は社会主義以前の価値から集団化の時期を通じても変化がない、この「不平等」は家族構造に根ざしている、さらに近年の開放経済によってそれは強められている、と著者は主張する。以下はその概略である。⁽²²⁾

1949年以前の男女の役割

昔の事を聞くと人々は共産党のイデオロギーに影響されて、社会主義以前は女性の封建主義的従属を強調するが果たしてそうであろうか。その当時書かれたテキストから再現すると、男女の役割は明確に区別され、男性は農業生産、女性は食事の準備、服を作る、その他の家事さらに子どもの世話がある。毎日、男性は起きてまずモスクに行き、朝の祈りをささげ、両親の墓に参る。家に帰る頃、食事ができていて、家族で朝食をすませ、男性は家畜にえさをやり、畑に出かける、昼ご飯のとき戻り、その後昼寝をする。起きたら庭に出て家族と共にブドウを食べ、夕方は客と共に楽しみ、夕べの祈りをする。

また、社会主義以前、女性は外で働くことをしなかったというが、富裕な家族以外は女性も男性と同じように家事や育児の間に農作業をしていた。家計に関しても富裕な家族では女性も関与できたが、その他の家族では男の家長が家計を握っていた。

ライフサイクルの儀礼、たとえば結婚式、割礼式、葬式などにおいて女性は食物、衣服、現金などを寄付することを期待され、それは家庭での仕事から生み出されている。これらは男女の相互補完的な姿であり、一般的なイスラム家父長制では判断できない。さらに東トルキスタンでは離婚率が高いことを考えると、この地域独自の文化を考慮する必要がある。

イスラムでは妻や娘を見知らぬ男と会わせてはいけないというコーランからの貞淑の規則（ナマールム）がある。それは潜在的な結婚相手については親密さを避けることで

ある。現在では公的には、もしくは教育のある人はこれを時代遅れの遺物と考えるが、一定の影響力は残している。

集団化時期の男女の役割

1950年代に農業改革が始まり、1958年に共同体ができ、私有財産に大きな変化があり共同所有になった。思い出されるのは共同の食事、食物の不足、共同作業、強制的な共同保育、私的な職人活動の制限である。私有は家と小さな庭、2頭までの羊だけであった。中国人の学者は男女平等が女性の生産活動参加によって実現したという。しかし、それは当の女性からは苦い思い出しか聞けない。体を壊すようなきつい仕事をさせられ、さらに家事も負担していた。

人々は集団化の時期の共同作業は不必要であったという。また、一つの村に一つの保育所があり、それはある人の家が当てられていた。子どもの世話は高齢の婦人、産後40日の労働免除の女性がしていた。多くの子どもを抱え、辛い仕事であった。泣き叫ぶ乳児をなだめるため乳をやることもあった、しかし、それは多くの乳キョウダイ(エミルダシュ)を作ることになり、コーランによれば彼らは互いに結婚できないことになる。

この時期も男性の仕事が25点であるのに対して、女性は18点と低く評価され、さらに家事と育児が女性の役割というのは変化していない。

改革開放時期の男女の役割

改革開放は新疆では2年遅れて、1980年から始まった。農作業など肉体労働は男性に、家庭内の仕事は女性に割り当てられた。一週間に2回洗濯し、10日に1回ナンを焼く。義理の母と住んでいる場合は、母に子どもの世話を頼む場合もある。

今でも女性がいなくては家庭が回らないと考えられているから、離婚した女性、未亡人は再婚すべきだと言われる。三人目の妻にも逃げられた男が言う、「妻がいなくては何にも出来ない。お湯をわかし、お茶を入れ、パンを作り、洗濯をし、病気のとき世話してくれる女性が必要だ。息子は出来ないし、娘や義理の娘は貞淑の規則があるから私の身の回りの世話はすべきでない。」

だが、男性はともかく女性は自分で身の回りのことはできる、だからそれほど再婚の必要性はない。だが、ウイグルでは女性は弱い存在(アジズ)と考えられ、男性の保護が求められている。若い夫婦は自分の家を持っていても、数年は夫の実家で過ごす。その期間、義理の母への労働奉仕(ケイナナ・ヒズミティ)をする。離婚のときはこの期間の長さで財産分与が決まる。

開放の時期の後半になると、さらに男女の役割が特定化される。家事、育児、年寄りの世話、ドッパ（帽子）作りのような小間仕事は女性、農作業、ビジネス、他の職人的仕事は男性と考えられた。共同作業は存続し、水路、道路、学校などの建設、開墾地の拡充などである。それらは封建時代の義務労働の言葉、「アルワン」と人々に呼ばれていた。政府はそれを自発的労働といていたが、人々にとっての自発的労働はモスクをつくることだけである。集団化の時代と違って、共同作業には男だけが出るようになった。

専門化

1990年代成功したひとは農業外での仕事、フェルトづくり、靴の再利用などをして利益を得ている。このような技術の伝達は集団化の時代には不可能であった。だから、現在の30代、40代は「失われた世代」であり、最下層を形成している。

政府も家畜を増やすことを奨励している。それが現金収入になる。その世話は男女共同で行なわれている。

市場化が進むにつれ、ビジネスは男の仕事と考えられ、女性は家庭内に限られてきた。職人的な仕事もするが、ほとんど夫の手伝いと考えられている。帽子をつくることは、仕事というより、暇な時間でのレジャー的活動である、あくまで本業として男は農業、女は家庭である。「女性の日」でも村の女性が優れた義母（グゼル・ケイナナ）、優れた嫁（グゼル・ケリン）として表彰される。それは経済活動ではなく家庭内での家事育児に対して行われる。

このような女性の地位の変化は一般的な中国の女性の歴史とも一致する。「女性の労働力化から婦女回家まで」⁽²³⁾として1949年の建国以来の変化を概略すると次のようになる。1958年大躍進期は社会主義からの家父長制への介入であり、家事の社会主義化を試み、集団食堂などがつくられた。これは労働組織のみならず再生産組織としての家族までも解体しようとしたのである。だがこの試みは失敗した。その後、文化大革命になると再び女性の家庭外労働が推奨され、男性にできることは女性にもできると考えられ、強い女性像が称揚された。この結果労働力に占める女性の比率は1978年以降43%台を維持している。しかし、開放経済の下、経済効率が追求され、「非効率的な労働者」としての女性を家庭に返そうとする動きが強まる。女性の社会進出も二重負担という側面を帯びている。農村部では人民公社解体、生産責任制の導入を機に、労働単位としての家族が復活してきており、家父長制的秩序がその基盤を回復したということ

もできる。

4. 男と女の世界

ウイグルでは誕生から死まで、いたるところで、男女の区別がなされる。

中国などアジア諸国では男子を出産することが強く期待され、イスラム諸国でもそうであると考えられてきた。しかし、女子を100とした場合、男子はウイグルが104.9、カザフは100.3、回は112.5、漢は109.0である。中国全体では113.8であり、ウイグルもカザフもむしろ女子選好に傾いている。⁽²⁴⁾

トルファンではぶどうの収穫のとき、姻戚関係で労働相互援助がある。子どもは少なくとも2人の娘と多くの息子という家族が好まれる。さらに、これらの娘の結婚は同じ村、同じオアシスで行われることが多い。2人以上の娘が求められるのは、それによって夫同士の関係、義理の兄弟の関係(バジャ)ができ、経済的協同によって2つの家族を結び付けられるからである。このような水平的な兄弟姉妹関係が強調される。たとえば、ウルムチで妻の親族は市内に住むが、夫の親族はふるさとのオアシスにいる場合、バジャの関係は特に重要になる、バジャは同じ年齢層で作られるため、家族の中で姉妹がいつも行き来すると、その夫たちもそこに巻き込まれ、親密になっていく。⁽²⁵⁾

ウイグルにはイスラム社会特有の割礼(スナットイ)があるが、これは男子だけに限られ、女子にはない。

伝統的にはカシュガルでは男子が生まれると宴会をするが女子はしない。40日目に命名式をする。4、5才のときムラー(イスラム聖職者)のところで勉強し、それを終わると男子は商業の徒弟奉公に行った。スナットイとよばれる割礼は7才頃行われる。痛みを伴う身体変工であるから、かなり強く記憶に残るであろう。これは成人儀礼ではないが、漢人に囲まれた新疆ではイスラムのアイデンティティとなっている。

「割礼は現在、病院でもらい、家で祝う。牛か羊を1頭料理する。近所や親戚など300人位集まる。割礼したら15日間動かないようにしてスープなどで栄養をとる。昔は割礼の専門家がきて、タマリスクという木の枝で性器を挟み、包皮を伸ばして輪切りに切った。綿の灰で消毒し、ガーゼで巻いた。専門家には10-15元払った。泣きわめかないように卵を口に入れる。切った包皮は家の隅に埋める。」(カシュガルの農村)

割礼に関して、コーランは何も言っていないが、イスラム教徒は義務としてこれをする。

年齢は地方の習慣（アダット）にまかせ、アラブ地域では生後7日目から3才の間、クルド人は3才から7才の間、ペルシャ人は15才までとまちまちである。ウズベクでは7才から9才の間、タジクは学校に行く前、7才までに行う。

この割礼によって男であることを意識させられ、割礼以前は母親と同行することが多かったのが、同年齢の男の集団に属することになる。祝いの宴会も男性は中庭、女性は部屋というように、その区別は厳格である。結婚式も町のレストランで行う場合、部屋を半分にしきって男と女の客に分かれる。

この割礼の祭りも費用がかかりすぎるという批判はあるが、助け合いの中で行なわれ、これをしないと、共同体から追放されかねない。家族だけで儀礼をしようとすると「村八分」をうけるおそれがある。

葬式については、亡くなったら、まず親戚に連絡する。ナン、お茶、ポロなどを準備する。女性の場合はプウィーという宗教者（女性のシャーマン）が体を洗い、白布で体を巻く。男性の場合はムラ - などが行う。次にモスクへ運び、墓に埋める。顔は西、メッカに向ける。故人の貸借を清算する。男性は金曜日、女性はコルバン（イスラムの祭り）の時に墓参りに行く。

カシュガルの農村で墓を作っていた墓守（60）に話を聞くと、都会では土地がないから一族の墓を何回も使う、前の人の骨が残っていたら取り出して、その後に入れる。農村では個人別に作る、子どもだったら親の墓に入れても良い。父の墓には息子、母の墓には娘を入れる。男性の墓と女性の墓は形が少し違う。墓には何も書かれていない、近頃、日付、名前を入れる人がいる。墓を作る費用を聞いても、それは遺族の気持ちだからといって、はっきりと答えなかった。自分は主な収入は農業から得ているから。墓守の仕事をしているから村の共同作業には出なくてよい。亡くなった人はそのひとの親、親戚の近くに埋める。長生きの人は深く、広く掘る。

5、おわりに

ウイグルは中国の一部となってからは、激動の歴史であった。とくに人民公社などの集団化の時代、文化大革命の時代、家族と女性は巨大な国家の力に翻弄された。だが、現在のように社会主義市場経済と改革開放になると、家族のつながりや盛大な結婚式の習慣などが復興してきたといわれる。しかし、以前の家族システムがそのまま復古してきたのではない。ある意味では社会主義体制をくぐりぬけて、近代化したともいえる。

社会主義による女性解放は不十分に終わったとはいえ、イスラムの古い法制はなくなっている。

ウイグルはイスラムであるが、中近東のそれほど強固なものではない。中国の国家の政策でもあろうが、原理主義的な信仰にのめり込まないようにしている。とくに知識人の間では、イスラムの影はうすい。それでも、中国国内からのイスラムに対する偏見は根強いものがある。女性の地位も低いと見られている。だからこそ、社会主義が頂点であった集団化の時代が遠くなった今、また後戻りしていると中国側から言われるのであろう。

だが、イスラム社会は、その最初期の社会において、男女間の関係の基盤として階級の構造を取り入れたが、同時に倫理的観点からは、すべての人間のあいだで、道徳的、精神的に平等であることを説いた。⁽²⁶⁾イスラムの女性がヴェール、チャドル、ブルカをとれば解放されたというのは、西欧的な近代化の基準に過ぎない。イスラムにはもともと男女を差別する精神はないが、その精神をどのように解釈し、制度化するかはイスラム諸国によってまちまちであり、その精神を十分に展開している国はない。イスラム諸国を均質と見ることも、コーランだけで考えることも誤りである。多様な文化のうえにイスラムは乗っているのであり、女性に関してもその文化を見る必要がある。

[注]

(1) 桜井啓子、1999、ヴェールの向こう側、図書9月号、p. 21

(2) 中山紀子、1999、イスラムの性と俗、アカデミア出版会、p. 44

(3) エマニュエル・トッド(石崎晴己、東松秀雄訳)、1999、移民の運命、藤原書店、

p. 31

(4) トッド、前掲書、p. 51

(5) 内藤莞爾、1967、末子相続の研究、弘文堂、p. 21

(6) 中山、前掲書、p. 105

(7) トッド、前掲書、p. 379

(8) 伊筑光、茆永福(主編)、1996、新疆民族関係研究、新疆人民出版社、p. 91(中文)

(9) トッド、前掲書、pp. 381 - 382

-
- (10) Mackerras, Colin、1995、China's Minority Cultures、Longman、p. 167
- (11) 伊筑光、前掲書、p. 92
- (12) トッド、前掲書、p. 382
- (13) 同上、p. 317
- (14) 同上、p. 235
- (15) 伊筑光、前掲書、pp. 98 - 99
- (16) Anderson, B.A. and B.D. Silver、1995、Ethnic differences in fertility and sex ratios in China: Evidence from Xinjiang、Population Studies vol. 49、pp. 215 - 216
- (17) Mackerras, ibid, p. 73
- (18) 桜井、前掲書、p. 21
-
- (19) 伊筑光、前掲書、pp. 104 - 105
- (20) Mackerras、ibid、p. 146
- (21) Hannum、E. and Yu Xie、1995、Ethnic and gender stratification in an economic reform era: the case of Xinjiang china、University of Michigan Population Studies Center、research reports, no.95-327, table3
- (22) Beller-hann, I、1998、Work and gender among Uighur villagers in Southern Xinjiang、Cahiers d'etudes sur la Mediterran orientale et le Monde turco-iranien、n. 25、pp. 94 - 109
- (23) 瀬地山角、1994、家父長制の比較社会学、相関社会科学2、ジェンダー、サイエンス社、pp. 312 - 314
- (24) Anderson, ibid, p.225
- (25) Rudelson, J.J.、1997、Oasis identities: Uyghur nationalism along China's silk road、Columbia University Press、pp. 82 - 84
- (26) ライラ・アハメド(林正雄他訳)、2000、イスラームにおける女性とジェンダー、法政大学出版局、p. 344
- 「すべてを神におまかせした男と女
信仰深い男と女

言いつけを守る男と女

誠実な男に誠実な女

辛抱強い男に辛抱強い女

.....

いつもいつもアッラーを心に念ずる男と女

こういう人たちにはアッラーは罪の許しと大きな御褒美を用意して置きになった」

(コーラン)

(本論文は、2000年度－2002年度にわたる日本学術振興会、基盤研究(C)課題番号12610313、の成果の一部である。記して感謝をしたい。)

「福岡県立大学紀要、第10巻第2号、2002、pp、1 - 13」